

収集委員会のこと

守安 収

年度末が近づくと、全国の公立館の多くで収集評価(審査)委員会が開かれます。改修工事で休館中の当館でも先日行いました。平成29年度分の購入ならびに寄贈に関する評価とその受け入れの是非を決める重要な会です。私どもでは2段階に分かれており、まずは価格評価の会、それを受けて館藏品に相応しいか否かを判断する会を催します。前者は個々の作品・資料の売買価格に精通した美術商が中心となり、後者は外部の学識経験者を迎え、館員はあくまで説明役となって行います。そういう審査を通じて、さらに県庁内での手続きを経て正式に館藏品の仲間入りです。購入の場合の評価が厳重なことは想像できるかもしれませんが、しかし、実は寄贈も同じです。寄附の申し出があったからと何でもOKというわけにはいきません。内容を精査し、後々の修復のことも勘案しながら本当に館にとって必要なかを判断することが求められます。委員会に提出した後で、「お断りすべき」と否決されてはたまりません。ゆえに館内での事前審査は入念です。そして、これらすべてをクリアしたものだけが、新収蔵作品展でのお披露目という運びになります。とはいえ、その一部は4月20日からのリニューアルオープン「県美コネクション展」(概要は別に本紙掲載)に早速登場します。寄贈品についてはいうまでもありませんが、購入品であっても持ち主のご厚意があつてのことです。そういった方々に支えられてコレクションは充実していきます。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)/年末年始/展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース120号をお届けします。3月18日で開館30周年を迎えました。季刊発行しているこの美術館ニュースも120回目の発行です。初期はB5版のミニ冊子から始まり、41号からA3変型折の形式に(ただし、いずれもモノクロ頁あり)。そして25周年で岡山出身のデザイナー・原研哉氏に当館のシンボルマークとロゴタイプを手掛けていただいたことが契機となって、101号から現在のフルカラーA4版8頁のデザインへとリニューアルしました。エントランス受付周辺ではバックナンバーを自由閲覧できるようにしておりますので、当館のこれまでの歩みにぜひ触れてみてください。



「美術館の紹介」vol.20

中庭は屋外にある広場でありながら、当館と天神山文化プラザとの間につくられた半内部的な空間である。前号でご紹介した半外部空間的なつくりの屋内広場とともに、外部と内部が反転した関係にある。

開館30周年を迎えて

守安 収(館長)

岡山県立美術館は1988年3月18日、現在の岡山市北区天神町の地に開館しました。同時期の瀬戸大橋開通、新岡山空港開港と並んで岡山県の3大プロジェクトのひとつと位置づけられ、県民の期待を担ってのオープンでした。全国的にみると、県立美術館としては後発です。そして、ようやく本年(2018)開館30周年を迎えることができました。設立のための準備作業は1980年から始まり、本館は「郷土ゆかりのすぐれた美術作品を収集・展示するとともに、内外の芸術活動を紹介する展覧会やイベントを開催し、県民の幅広い文化活動の発展に寄与することを目的として設置」されました。以来、30年を経ましたが、依然として方針は変わることなく「岡山の美術」を常設展示のテーマとして収集・展示・保管に励み、各種の企画展示や教育普及事業を交えながら運営しています。

私どものように収集、ならびに常設展示部門を「郷土ゆかり」に徹した県立美術館は、全国でも希な例であるようです。どこの館にも「郷土美術」のスペースはありますが、私どものように常時1200㎡を使用する館は異色といってもよいでしょう。本来、美術の世界に過度な地域限定を掲げることは不適切であると考えます。何故なら美術、芸術は本来、グローバルな存在であるからです。しかし雪舟以降、あまたの芸術家を輩出し、また当地への多くの来訪者を迎えたことで築き上げられた「岡山の美術」の質と量とは、決してお国自慢ではなく、誇るに足る高い水準にあると確

信しています。ローカルではあるものの、その枠から大きく飛躍しグローバルな存在となっていった「岡山の美術」の魅力を知っていただきたいと願っています。常設展示室は当地における美術風土、いわばアイデンティティを実感することのできる場であり、あわせて岡山に関する歴史や文化、伝統の豊かさなどについても認識いただけることでしょう。

とはいえ、常設展の入館者が減少しつつあるのが悩みのひとつです。日本の美術館は常設展では入館者を期待せず、イベント的で一過性のものとなりがちな特別展で数を増やすのが通例です。当館では最初から特別展の折には常設展料金を加算せず、一緒にご覧いただきてきました。そうした機会に常設作品に出会っていただくことでファン層の拡大を図ってきたのです。しかし、大勢の動員が見込める人気の特別展や海外展の地方巡回受け入れなどが財政面等、諸般の事情で困難になってきた近年は、そういった手法だけでは対応できない状況になってきました。

常設展を使った学校との連携を進める施策は早くから展開していますが、今後はより一層強固なものにしていきたいところです。4月のリニューアルオープン後は展示室に外国語表示を増やします。100人に迫る数の自慢のボランティアメンバーの活動にも力を得ながら館が提供するサービスの質と量とが利用者の満足度を上げることができるように努めたいと思います。また、美術館の魅力アップのための広報スタッフの配置が決



左:重要文化財 雪舟等楊《山水図(傲玉澗)》(展示期間:5月30日-6月10日)
右:重要文化財 玉澗《廬山図》(展示期間:6月8日-7月1日)



左:ガブリエル・フォン・マックス《煙を出す壺を抱く女性》制作年不詳
島根県立石見美術館【2期展示】
右:原田直次郎《風景》1886年

まりました。美術館は入館者だけが利用するわけではありません。幅広い利用者全体にサービスできる態勢をつくりあげ、当館がなくてはならない場所となるのが目標です。繰り返しになりますが、岡山県立美術館が作品と出会う場として機能すると同時に岡山と触れ合う場となることを念じてやみません。

この開館30周年を迎えるに際し、館藏品と寄託品のおよ5,000点のなかからピックアップした作品を収載した『収蔵作品選2018』を刊行しますが、新所藏品(購入、寄贈)や新規寄託作品、岡山県新進美術家育成「I氏賞」受賞作家からの購入品などを加えました。今回は英文での作家解説を盛り込み、ページ数も大幅増となっています。ぜひ作品鑑賞の手引き、岡山への案内書としてご利用ください。

また、記念展として4月20日から7月1日の間、1期(4月20日-5月27日)と2期(5月30日-7月1日)とに分けて「県美コネクション つながる『ひと』・『もの』・『こと』」を開催します。これは収蔵作品をいくつかのテーマに分け、「岡山ゆかり」から広がる「ひと」・「もの」・「こと」を紹介するものですが、1期は春、家族や地域とのつながりを中心に、2期は夏、作家や作品がここにあることからさらに広がっていく豊かな美術の世界を他館からの借用作品も交えながら展示するものです。学芸員各人がそれぞれのコーナーをつくりますので、以

下それを列挙してみましよう。

【1期】／【2期】展示替

◇つながる地域と雪舟／雪舟がつないだ時代

◇親子・家族のつながり(浦上父子・備前焼)／
岡山の四条派

◇岡山と民藝／竹喬と遙邨

◇洋画家の地域のつながり／

海外での学び―師や仲間との交流

◇動植物へのまなざし 春／夏

◇ファッション 和装／洋装

◇岡山の風景 戦前／戦後

【通期展示】

◇時間と時代

◇シュール

◇抽象―色・線

◇モノ・カタ

これらに加えて、対談、講座、フロアレクチャー、ワークショップ、県美検定等の多彩な催しの他、無料入館デー(1期、2期それぞれの初日)や託児サービスデー、夜間開館日なども設けて来館をお待ちしています(詳細はHPやチラシをご覧ください)。

そして最後に、これまで当館に作品収集や展示をはじめ様々な形でご協力くださいました関係各位に改めて深く感謝の意を表明いたします。と同時に、今後ますます多くの方々に館の発展へのご協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

Connection

大山 真季(学芸員)



メンテナンス中の館内。普段は開放的な空間である地下1階屋内広場も、天井まで全面に足場が組まれている。

「20代は情報を吸収しているんな経験を積む。30代になったらその蓄えた経験や知識がパズルのピースを組み合わせるようにはまって、離れたもの同士が上手くつながったり、展開していくことが出来るようになる。年齢(経験)を重ねるごとにそのつながりが早く、上手くなっていく。年配者で駄洒落を次から次に口にする人がいるのはそういう能力に長けているからだ。」と、大学時代、講義中に先生から言われ妙に納得してしまった覚えがある。

開館から30年が経ち、あちらこちらで修繕が必要になった施設をメンテナンスするために2017年12月から約4ヶ月間の長期休館が設けられた。休館中の現在は次回展覧会へ向けた準備や13年ぶりの刊行となる『収蔵作品選2018』の制作真っ只中だ。休館明けの4月20日から開催する開館30周年記念展のコンセプトは“コネクション”である。先のページで館長が述べているように「郷土ゆかり」を軸に運営してきた当館は、岡山に「つながり」のある作品を収集してきたが、その特長を大いに感じていただける展覧会となるはずだ。

中国絵画の影響を受け、後進の画人にも多大な影響を与えた雪舟にまつわる地域的なつながりと時代的なつながり。あるいは、当館の洋画コレクションの中でも人気の高い原田直次郎がドイツ留学中に描いた《風景》(1886)と、その留学時代の師であるガブリエル・フォン・マックスの作品を他館から借用し展示するほか、津山市出身のファッションイラストレーター森本美由紀が描いたスタイル画と、描かれた同時代ファッションのドレスなど、作品から広がる様々な「つながり」をテーマに展覧会で紹介する*。

今回はさらに、学芸員による作品の見どころ解説や講座、外部の美術関係者や作家を招聘し開催するトークイベントに加え、体験型イベントも多数用意している。様々な用途のためにつくられる器を鑑賞するだけでなく、実際に体験するイベントとして、お茶(抹茶・煎茶)・岡山の地酒・岡山の食材を楽しむプログラムや、“つながり=結びつき”から「縁結び」をテーマにした招き猫づくりワークショップなど、作品展示に留まらず多様な角度から「つながり」を楽しんでいただける内容となっている。

これまでに開催してきた様々な事業や他館との交わりで培った経験と関係、そして岡山の様々な文化や県内出身者あるいは県内で活躍する人々などと、当館が積み上げてきた近世から現代までに及ぶ幅広いコレクションをつなげることが30年の幕開けとなる。

20代が終わり、これまでに集めた手持ちのピースが少しずつ形をつくり始めた。ここからどのようなピースが加わり、つながって新たな形となって行くのだろうか。

*ガブリエル・フォン・マックス、森本美由紀作品とドレスの展示はいずれも第2期(5月30日-7月1日)展示。その他の展示については前頁を参照。

あれもこれも美術館

福富 幸(主任学芸員)

昨夏、当館での博学連携シンポジウムを皮切りに、この半年ほどの間、いくつか研修会やフォーラムに参加しました。(下記参照)当館の取り組みは別途報告書としてまとめられますが、少し昨今の美術や美術館を取り巻く状況をとらえておきたいと思います。

①と③は主に小中高大*学校現場との連携がテーマです。出張講座や団体鑑賞、職場体験などで学校側も美術館や博物館施設の活用を進めていますし、初任研や免許更新のための教員研修の場としての利用も増えています。施設側は子どもたちの学習を支援することは当然ですが、“利用者獲得”という算盤もはじきます。我々にとってひとつ成果と言えるのは、当館の収蔵品を元に高校生がビデオを作成、そのビデオを使って小学校で授業が行われたという展開があったことです。

当館では「アクセシビリティを高める」観点から、まだまだ十分ではないにしろ、盲学校との連携や手話サービスなどにも取り組んでいますが、②のフォーラムでは表現者としての障害者の支援や評価、福祉のあり方などさまざまな問題提起がなされました。印象に残ったのはバリアフリーと言われる中で「バリアは必要」という障害を持った方の言葉でした。多様な美術活動に対してどういったスタンスをとるのか、各々が自分の考えを持っておく必要を感じました。そこには美術とはなにか、評価するとはどういうことか、大きな命題も含んでいます。

④と⑥は地域と文化活動がテーマです。地域の活性化や町おこしをアートを通して模索する、近年各地で見られる動きに対して、若者を中心としたNPOの活動などが報告されました。私たちは、「やりたいことを実現できる可能性」に取り組む若者たちの想いをくみ取れる“大人”だろうか、なんてことも考えましたし、そうした活動のどこか危うさも感じました。ここでは「人につながるネットワーク」という言葉が印象に残りました。核となる人がいなくなるとネットワークもなくなる、というものです。また昔ながらのコミュニティと新しいネットワークとの確執も問題となりました。⑤は地域にとって史料(文化財)は重要なものとの考えから、有事・平生を問わず、その保全に取り組む行政、大学、図書館、博物館、美術館等から関係者が集まりました。こちらも多くがNPOやボランティアがベースです。いざ有事ともなれば、その活動は長期にわたり、継続することの困難さが報告され、外から地域に入っていくということでは④、⑥とも共通する課題もあり、普段からの関係性が問われます。人に付随する専門性(スキル)を、所属を超えてどう活かすか、働き方ということも考えさせられました。

⑦、⑧は眼前の施設運営に関わる問題です。来館者数が伸びない、という多くの施設が何か打つ手はないものか、と集まったような具合ですが、人も予算も限られた中で、すでにできることはやっているのが現状。「少子高齢化」「趣向の多様性と選択肢の多さ」「経済至上主義」「ネット社会の普及」—なにかと忙しい日常の中で、わざわざ美術館を訪れる、どういう意味があるのか。数字だけが問題ではないのですが、数字が問題なのです。(だからこうした研修会が開かれている。)

教育や表現(創作)活動、地域の活性化や文化財の保護、そして集客と、いずれの問題にも今は「連携」や「ネットワーク」がキーワードとして果たす役割は大きいようです。あれもこれも考えていかなければならない美術館(そして学芸員)ですが、最終的には“1点の作品になぜか心を動かされることがある”そのことを大切にしたいと思います。

-
- ① 博学連携シンポジウム「学校×美術館 アクセシビリティを高める多角的・多様な活用」(H29年8月11-12日/岡山県立美術館)
 - ② 障害者芸術支援フォーラム〜アートの多様性について考える〜(H29年9月9日/日本財団)
 - ③ 研修会「博物館と大学等教育・研究機関の連携」(H29年11月9日/日本博物館協会中国支部)
 - ④ フォーラム「地域からの教育再生」(H30年1月13日/福武教育文化振興財団)
 - ⑤ 第4回全国資料ネット研究交流集会(H30年1月20-21日/実行委員会)
 - ⑥ 自治体とともに考えるSUAC自治体文化財団マネジメント講座公開セミナー「多層的ネットワークと拠点づくり」(H30年1月27日/静岡文化芸術大学)
 - ⑦ 効率的な政策立案のために〜地域分析の方法と事例〜(H30年1月31日/岡山県)
 - ⑧ 合同研修会「多彩なメディアを活用した集客力アップのための広報について」(H30年2月1日/関西博物館連盟、岡山カルチャーゾーン連絡協議会)

太平洋画会メンバーによる似顔絵にみる遊び

橋村 直樹(学芸員)

岡山県立美術館の所蔵作品に《太平洋画会寄せ書き》という掛軸がある。これは、日本最初の洋画団体・明治美術会の後身として、満谷国四郎や吉田博らによって明治35(1902)年に結成された太平洋画会の主要メンバー8人が、一枚の紙に自分の似顔絵を寄せ書きしたものだ。作者は左上から順に大下藤次郎、鹿子木孟郎、中川八郎、高村真夫、河合新蔵、小杉未醒、吉田博、満谷国四郎である。彼らの似顔絵を一つ一つ見ていくと、各人が自分の顔貌の特徴を理解し、それをかなり誇張してユーモラスに表現していることがわかって面白い。例えば、左上の大下は、他の人たちよりも倍以上長く顔を引き伸ばし、目も鼻も描かず、嚙んだ口を斜めに歪ませている。その隣の鹿子木も黒々とした髪や逆八の字の太い一本眉と細い目、口元からのぞく前歯を目立たせて描いている。また河合は耳を大きく口を蜻のように描き、小杉はえらの張った顎と大きなだんご鼻を強調している。極めつけは満谷で、頬骨から顎にかけてすっと細くなる輪郭や深い眼窩の奥の大きな目、口髭や禿頭を自虐的に誇張している。

ユーモラスに表現されたこれらの似顔絵が、彼らの実際の顔貌の特徴を反映したものであったことは、今日まで伝わる写真から確認することができる。例えば、『大下藤次郎の水彩画』(石見美術館編、美術出版社、2008年)所収の肖像写真を見ると、確かに大下は少々面長な顔をしていたようだ。また、満谷は、肖像写真からも明らかなように、似顔絵で強調された特徴と一致して、禿頭で目力が強く、彫の深い顔をしている。

画家たちが誇張したそれぞれの顔貌の特徴は、太平洋画会という仲間内で共通認識されていて、それをコミカルに描くことは、メンバーの中で笑いを誘う遊びとして成立していたのであろう。また、そのような自虐的な似顔絵を寄せ書きすることは、太平洋画会の仲間たちの結束力を高めることにも一役買っていたように思われる。だから、仲間内での遊びとして成立した笑いを誘う似顔絵は、他所でもしばしば描かれていたようだ*。例えば、ここで寄せ書きした画家たちが全員参加した瀬戸内をめぐる写生旅行をまとめた『十人写生旅行』(小杉未醒編、興文社、1911年)には、この寄せ書きの似顔絵と同様のユーモラスな似顔絵が掲載されている。

ところで、『十人写生旅行』に似顔絵が掲載されて、この寄せ書きに似顔絵が描かれていないのは、石井柏亭と中村不折の二人であるのだが、石井は渡欧間近であったため三日後には一行から離れ、中村は体調不良もあって同行していなかった。つまり、この寄せ書きの8人が長く一緒に写生旅行したメンバーであったわけである。気の置けない仲間たちによる写生旅行の宴席上で、おそらくこの寄せ書きは描かれたのだろう。

※中村不折周辺の人物の似顔絵を中心に議論した論考として以下がある。南出みゆき「漫画による私的交流関係の緩やかな拡張—中村不折周辺の似顔絵群をもとに—」『大正イマジュリー』No. 11 (2015)、91-110頁(文献は島根県立石見美術館・川西由里氏教示による)。



《太平洋画会寄せ書き》制作年不詳



満谷国四郎顔写真

展覧会スケジュール

3月
March

2017年12月11日|月|—2018年4月19日|木|

※メンテナンス休館

岡山県立美術館は、施設等のメンテナンス改修のため、2018年4月19日まで休館いたします。皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご了承くださいませようお願い申し上げます。

各展覧会期間中、当館学芸員による
ギャラリートークや美術館講座など
随時開催予定。詳しくは当館HPまで。
<http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

4月
April

5月
May

4月21日|土| 14:00~15:30

鼎談 「県立美術館の今、そして未来へ」
講師 島谷弘幸(九州国立博物館館長)、水沢勉(神奈川県立近代美術館館長)、守安収(当館館長)
会場 2階ホール(先着210名)

4月20日|金|—7月1日|日|

【特別展】 岡山県立美術館開館30周年記念展 県美コネクション つながる「ひと」・「もの」・「こと」

昭和63(1988)年開館した当館は、今年開館30年の節目を迎えます。本展では、当館の活動の柱である岡山【ゆかり=つながり=コネクト】をキーワードに、当館がこれまで培ってきた「ひと・もの・こと」を作品とさまざまな関連事業でご紹介します。“岡山ゆかり”であることがいかに豊かな文化を内包するものであるか改めてお気づきいただけることでしょう。

4月22日|日| 13:30~

WS 「綴る：和綴じ本づくりWS」
講師 山下香織(岡山県立記録資料館司書)
会場 地下1階研修室(申込先着20名・材料費500円)

6月
June